【３学年のまとめ】

１．学年の取組

校内研修での取り組みを検証するため、本学年では「Ａ－１　善悪の判断善悪の判断、自律、自由と責任」を取り上げ、授業づくりを行った。良いことや悪いことを理解した上で、正しい選択をすることができない、頭の中では正しい判断ができているものの友達に影響されてしまったり、断る勇気がなかったりして正しい選択ができない、自分は正しくないことをしないが周りに正しくないことをしている友達がいても我関せずという態度をとる、などの児童の実態がある。

そこで、主人公の気持ちを考えることで、してはいけないと判断した理由や根拠について考えさせると共に、相手を止めたかったけど言えない主人公の姿から、仲の良い友達に誘われて揺れ動く気持ちに共感させることにした。また、主発問においては、止めるという行動は必要なのか、なぜ必要なのかという行動の根拠となる理由について考えさせることで深い価値理解につなげることをねらい授業作りを行った。

また、２クラスでの先行授業を行うことで授業検証を行い、価値についてより深く考えることが出来る授業展開を学年で検討した。

①価値の方向付けをするためのアンケート調査の活用

「友達に正しくないことに誘われたらどうするか。」ということを事前にアンケートとして問い、その判断の理由を明らかにした。また、実施したアンケートを授業の導入部分に活用することで、短時間での価値の方向付けを図った。

②考えが深まる意図的な問い返し

児童の意見に対して、「なぜ？」と根拠を聞いたり、その児童が発言した理由を別の児童に問い返したりすることで、なぜ自分はそう考えたのか深く考えることになり、自分のこれまでの経験と照らし合わせて考えられるようにした。

また、展開部分の友達から正しくないことに誘われた時の主人公の心情を考える発問では、最初は友達と同じように正しくないことをしなかった判断理由を考えさせたが、補助発問として止めたかったのに止められなかった主人公の心情を問う問い返しを行うことで、正しい判断をしたものの自分の判断に自信を持てず友達を止めることにまで至らなかった主人公に共感させることにした。

中心発問においても、どんな状況下であっても友達を止めるという考えさせるために、問い返しを用意し、児童により深く考えさせるようにした。

２．授業実践について

主題　正しいと思うことを行う　　内容項目【Ａ－１　善悪の判断、自律、自由と責任】

本時のねらい　正しくないことをしている友達を止めることは必要なのかを考える活動を通して、自分が正しいと判断したことを行うこと、正しくないと思われることをしている人を止めることの難しさや大切さ、その良さについて気づき、正しいと判断したことは自信を持って行おうとする実践意欲と態度を育てる。

教材名　ＳＬ公園で（出典「新しい道徳３」東京書籍）　　授業者　３年１組　池端　美希

【授業の流れ】
①アンケートを想起し問題意識を持たせる。
②SL に乗ろうとしなかった主人公の気持ち、「やめなよ」と言いたかったけど言えなかった主人公の気持ちを考える。
③友達を止めることは本当に必要かを考え、課題に対する自分なりの考えを持つ。
④自己を振り返る。

「じゃあ怒られると思うから乗らないってことかな？」
「なんでそう考えたの？」「もっと詳しく話してみて。」
「〇〇さんはどうしてそう考えたんだと思う？だれか付け足せる人はいるかな。」
「相手が止めてほしくなくても？」「相手が誰でも止める？」
など、問い返しを多用して授業を展開した。

児童の振り返りより

・私は友達を止めたいです。なぜなら、自分が正しいと思うからです。
・いとこや弟が家の高い塀に登っていて、「やめなよ。」と言っても「関係ないし。」と言われてしまって、何も言えなくなってしまった。いとこが降りるときに足をすりむいてしまって、やめなかったいとこも悪いけど、強く言えなかった自分も悪かったと思う。
・学校から家に帰る途中に公園があって、そこを近道している人を見た時、止めたくても止められなかった。だから、これから注意しようと思った。
・正しくないことをしている人を見かけたら、相手が誰であっても注意した方がいい。いけないことってわかっていても言えないこともあった。いけないことをしている人がいるなら、注意しようと思った。
・今までの自分は、誰かがいけないことをしていても止められなかったけど、今回の勉強を振り返ると注した方がよいと考えられました。

指導内容（指導者・ふじみ野市立西小学校　鈴木孝雄　教頭先生）

・ワークシートに自身の考えを書けない児童について
書かせることを目的にしてはいけない。道徳の目標は道徳性を養うことである。「書く」「話し合う」「発表する」ことは、そのための手段であり目的ではない。その手段の向上については全教育活動の中で指導する。
・心で思っていても行動に表せないことについて、それをよしとしてよいのか。心で思っている善をできないのはどうしてかを考えさせる。「どうして自信を持って言うことができなかったのか。」等、適切な発問を考える。
・価値観を可視化する方法を考えておく。例えば数値化する場合、A という考えを持つ人〇%、B という考えを持つ人〇%というように、視覚で分かりやすく把握できるようにする。
・子どもが考えたことを元に授業を組み立てる。今回も、「自信がなかった。」という発言から、別の展開をすることもできた。指導案から外れたとしても、児童の的確な意見や考えを取り上げ、「なぜ？どうして？～さんならどうする？」と全体に広げ、考えさせる。
・このような研究協議を研究後も続けていくことが重要。研究が終わってしまうとこのような協議会を行う機会が減ってしまうことが多いが、短時間でも教師同士で話し合う時間を設ける。

３．成果と課題

〇アンケートの活用、発問の精選により、中心発問について考える時間を十分にとることができた。
〇理由を尋ねる問い返しや、予め用意した価値に迫る問い返しは有効であった。また、日頃から繰り返し問うことで、児童自身にも考えの理由を発言する習慣が身についてきている。
▼発言者に問い返すだけではなく他の児童へ問い返してみるなどして、全体で深めていくコーディネートのスキルを身に付けていきたい。
▼価値について正対し、本時で考えさせたい価値は何か、それを考えさせるための発問をどうするかということをしっかりプランニングすることは重要だと再確認した。